

參五八第四号

明治三十三年十月起稿

參謀本部第五部

秘

徒步砲兵隊編制及要塞隊備砲台蓄留関心意見

0155

本案実施ノ為メ必要ナル火砲彈藥費ハ其全額ニ六、二
 六九、七八五^円ニシテ之ヲ自今七ヶ年ノ経続費トシテ支
 出スルトキハ年額三、七五二、八二六^円ニテ足ル但其彈藥
 ヲ内國ニテ製スル^ルキハ年額二、三一五、四八九^円ニ減ス^第
 十八表参照

0156

徒歩砲兵隊編制及要塞豫備砲分蓄論ニ関スル意見

目次

第一篇 総論

第二篇 徒歩砲兵隊

第一章 野戰榴彈砲隊

第二章 繫駕攻城砲兵隊

第三篇 要塞豫備砲

第一章 砲種砲数ノ決定

第二章 彈藥ノ準備

第四篇 人員ノ充用

第一章 要塞砲兵

第二章 野戰諸兵

第五篇 諸條規ノ増補

附表

野戰諸隊過剩得員表

第一表

要塞砲兵兵卒戰時得員表

第二表

要塞砲兵兵卒戰時要員表

第三表

獨立野戰榴彈砲大隊編制表

第四表

同 行李駄馬區分表

第五表

同 下士區分表

第六表

同 中隊及大隊既列兵卒區分表

第七表

同 輓馬並兵卒乘馬區分表

第八表

同 彈藥縱列編制表

第九表

同 彈藥縱列車輛區分表

第十表

同 彈藥縱列行李車輛區分表

第十一表

同 繫駕徒步砲兵聯隊編制表

第十二表

火 砲 彈 藥 費 概 算 一 覽 表	同	同	同	同	同
	砲 廠	砲 廠	中 隊 兵 卒 區 分 表	下 士 區 分 表	行 李 輓 馬 區 分 表
	縱 列 車 輛 區 分 表	砲 廠 縱 列 編 制 表			

第 十 八 表	第 十 七 表	第 十 六 表	第 十 五 表	第 十 四 表	第 十 三 表
------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	------------------

徒歩砲兵隊編制及要塞豫備砲分蓄論ニ関スル意見

第一篇 總論

平時計畫ナキ部隊ヲ戰時倉卒ノ際ニ當リ臨機編成ス
ルノ困難ハ我既ニ教次ノ經驗ニ於テ之ヲ知ル凡ソ事
ニ當ル者當時幸ニ處理ノ道ヲ錫クシ一時此困難ヲ忍
ビ得クリトスルモ其成立セル部隊ハ戰場ノ進退ニ野
期ノ活動ヲ欠キ尋テ其目的ヲ達スル能ハサルニ終ル
ヤ多シ

要塞戰及陣地戰ノ要求ヲ究タス為メ徒歩砲兵隊ノ編
制ヲ望ムヤ日既ニ久シ而シテ今ニ至ルマテ之ヲ我陸
軍戰時編制中ニ見ルヲ得サルモノ或ハ種々ノ事情ニ
制セラレシモノアラント雖モ職トシテ此要求ヲ充タ
シ得ヘキ兵器ノ制度アラサシニニ坐セズンハアラヌ

蓋シ徒歩砲兵ノ編成ハ其有スル兵器ノ關係上ヨリ蓋
兵種中長モ繁雜多岐ニ涉ルモノニシテ平時ノ計畫
久キ戰時満足ノ成立ヲ期シ得ヘキモノニアラサルカ
リ故ニ前述ノ要求ニ對シ此編成ヲ制定シ得ヘキ期ニ
達セハ之ヲ陸軍戰時編制中ニ編入シ彼令平時ニ於テ
ハ此隊ノ常設ヲ見ルニ至テハルモ少クモ年々之ヲ
勸員計畫ヲ為シ置クノ方法ヲ設ケサル可ラス其期々
今方ニ達セリ

隣邦要塞ノ設備ハ日ニ其度ヲ増進シ教年ナラヌニテ
新式築城ノ吾人ノ目前ニ横ハルヲ見ルニ至ラン野戰
築城ノ技術ハ近年大ニ其力ヲ増加シ砲兵戰術上既ニ
其一部ノ變化ヲ促シ來レリ又繼テ本邦兵器ノ如何ヲ
顧ミルニ從來制定ノ大砲ハ今日ノ戰術ニ照ラシ是等

ノ築城ニ對シ攻守共ニ砲戰ノ目的ヲ達シ能ハサル
 カ故ニ既ニ其制式改良ノ必要ヲ認メ今ヤ此目的ニ達
 合ヤル新式大砲ノ制定ヲ莫ルニ至リ是レ今日徒歩
 砲兵隊編制ノ嚆道ヲ急調メシムル所以ナリ
 本邦要塞ノ設備ニ亦爾次其歩ヲ進メ今ヤ之カ豫備砲
 制定シ以テ要塞防禦ノ擔保ヲ確實ナラシメ得ル
 工程ニ達スル迄來此豫備砲トシテ各要塞ニ配屬シ未
 リシニ至リ世七八年戰役ノ戰利ニ係ル一二攻守城砲ヲ
 除ク外一トシテ最新式ノ野山砲ナラサルハナンヤ之
 ヲ以テ要塞ノ擔保ヲ擔保セトス豈夫レ寒心セリ
 可クヤ然リテ然レテ是レ吾人カ好テ採リテ方策ニ
 又當時ノ事情ニ之ニ目ヤサシク得リシニ今
 存ヤリ蓋シ夙ニ豫備砲ノ必要ヲ認ムル而シテ今

商之方制定ヲ見ルニ至リサル所以ヲクハ要塞ノ設備
 商切継ノ時期ニ在リテ之ニ固有ノ力ヲ賦與シ其防禦
 計畫ニ急ト滞一ノ結果ヲ期スル能ハサル一依ルト由
 二是ハ要塞戰ノ要求ヲ答ル得ヘキ適長ノ攻守城砲未
 制定シテハサリシニ基固セズニハアラス而シテ全
 幸ニ此ニ個ノ要因ハ勿除セテハ是ハ徒歩砲兵
 編制ト同時ニ要塞豫備砲ノ制定ヲ唱道スル所以
 以テ也
 二城砲ト要塞隊備砲トハ互ニ密接ノ關係ヲ有シ彼此
 流用ノ途ヲ開キ置カサル可ク又換言スルハ攻勢作戰
 場合ニ在テハ要塞隊備砲第一ノ攻城砲ト為リ之ニ
 又ニ守勢作戰ノ場合ニ在テハ攻城砲亦第二ノ要塞隊
 備砲ト為ル是ナリ
 以ニ徒歩砲兵隊ノ編制及要塞隊備

砲ノ分蓄如何ヲ研究論述スルニ當リテハ須テ先ツ此關係ノ反ホス範圍如何ヲ鑑ミ而ル後徐ニ之カ立案ヲ試ミサル可ラス夫レ然リ然ルト雖モ茲ニ陣地戰ノ目的ヲ以テ編制ヲ試ミントスル野戰榴彈砲隊ハ或ハ攻城戰ノ先驅ト爲リ或ハ守城戰ノ後驅タルノ場合アリト雖モ抑モ此隊ノ成立ヤ野戰軍ノ新要索ニ基クモノタルカ故ニ先ツ之ト終始進退セシムルノ目的ヲ以テ編制上ノ諸件ヲ索メサル可ラス以上諸種ノ問題研究ノ結果ハ陸軍戰時編制及陸軍動員計畫令ニ對シテ多少修正ヲ要スルノ點ヲ察見スルヤルヘシ以下是等ノ諸件ニ對シテ遠次詳論スル所アラントス

第二篇 徒歩砲兵隊

第一章 野戰榴彈砲隊

近世火器ノ威力著シク増進セシ結果野戰築城ノ作戰
場裏ニ歡迎セラレ、ノ聲漸次大ト為レリ抑モ野戰間
屋裏ヲ以テ衆ヲ制スルノ位置ニ立ツモノ迄未ダクハ
地ノ利ニ依ラサルハナシ蓋シ火器未ク其威力ヲ逞
スルヲ得サル時代ニ在テハ之ヲ以テ往々其目的ヲ達
シタルモ、ソアリト選ル今ヤ火器ノ威力ハ築城(野戰的
築城)ノ力ヲ藉ルニテアラレハ地ノ利亦深ク恃ムニ足
ラサルヲ證明スルニ至リ今試ニ野戰一般ノ經過ヲ
察スルニ、決戦ノ期ハ彼我ノ力殆ク相平衡スルノ時ニ
至シ其間裏ハ自ラ時勢ニ陥リ衆ハ常ニ攻勢ヲ取ルヲ
見ルハ、此時ニ當リ守者ノ採ルべき策業ニテ如何夫
レ唯巧ニ野戰築城ヲ利用シ逐次頑強ノ抵抗ヲ為シ以

其力ノ均衛上決戦ヲ試ミ得ルノ期ヲ待ツアルノ
 故ニ攻者ノ作戰ノ經過中絶ハズ防禦陣地ノ抵抗ニ違
 遇ニ屢年者ヲシテ其目的ヲ達セシムルニ至ルヲ
 抑之武器ノ進歩ノ作戰ノ經過ヲ迅速ナラシムルノ
 傾向ヲ以テ間セテ野戦築城ノ範式火ニ其面目ヲ改メ
 シル結果トシテ該ニ亦火戦術ノ變化ヲ呈セリ是レ野戦
 是年野戦軍ノ戦鬪序列内ニ増射隊ヲ編入シテ野戦間
 屢遭遇ニハ陣地ノ攻撃及防禦ニ當リ野戦砲兵ニ望
 ム可カラカシ、威力ヲ發揚セシムル以テ作戰ノ經過ヲ迅
 速且有利トシシムル、今日ノ戦術上義ニ必要ナルヲ
 認ムルニ至リ、願フニ露國ハ千八百八十九年未だア
 兵の砲兵以テ野戦前線隊ヲ特設シ、佛國ハ千八百九十

三年十二月未榴彈砲隊ヲ戰時勅員スルノ方法ヲ規定
シ、他國亦今八百九十八年十月未榴彈砲大隊ヲ特ニ新
設シテ各軍團ノ戰鬪序列内ニ入シ、タルモ、皆此
理由ニ出サシムルハ、今之ニ、英戰ニ應用シ如何ニ偉
切ニ奏シタルカヲ見シテ、欲シハ、類ヲク之ヲ英國(百ニ
十七)榴彈砲(方南並ニ對スル作戦)ノ経道ニ求ムヘシ
各國既ニ野戰擲砲隊ノ編制ヲ設ル等若クハ、其一部
ヲ起スニ當リ、必ス常ニ之ヲ伴隨シ、カ、ルノ方針ヲ採
ルルヤ、夫レ既ニ説ク所、如シ今又蘇ク、將來我作戦地
ト豫想シ得ヘキ地方ノ大勢ヲ顧ミ、ルニ、其一部ハ處々
支那的築城ノ様ニシテ、若シ巧ニ之ヲ應用スルモ、ノ
ト、多クハ其抵抗力野戰築城ノ比、チ、ア、ラ、ル、ヤ、明、ク、シ、然、リ
ト、蓋、此、之、カ、為、ル、亦、時、ニ、攻、城、廠、ヲ、煩、ハ、ス、ノ、必、要、ヲ、モ、認

ヲサルナリ 於是乎我野戰軍ニ此種ノ砲隊ヲ編入シ以
 テ陣地戰ノ要求ヲ充タサシムルノ必要アルヲハ作戰
 地一般ノ地勢ニ照シ歐洲各國ニ比シ寧ロ一層大ナリ
 ト謂ハサル可ラス頃者我砲兵會議カ攻城廠内ニ十二
 釐米榴彈砲ヲ編入シタルモ亦職トシテ此目的ニ供
 セント欲シタルニ由ル
 野戰擲射砲隊ノ編制夫レ此ノ如ク重要ナリ果シテ然
 ラハ之ヲ編制スルノ方法如何是レ大ニ研究ヲ要スヘ
 キモノトス
 若シ專ラ作戰ノ顧慮ヲ基礎トシテ此編制ヲ遂ケント
 欲セバ欲露兩國ノ方針ニ準ヒ特ニ之ヲ新設スルノ利
 ニ便クモノナシト雖モ顧ミテ内地國防ノ跡ヲ察スル
 其事業未タ半ハナラズニテ經費ノ不足ヲ訴フルモ

ノアリ加之軍國亦曰之夢費ヲ懸スルノ時更ニ此新設
 費ヲ國家ニ責ムルホキハ國勢ノ現況ニ照ラシ忍ヒ
 能ハサル所トス
 若シ又經濟上ノ顧慮ニ重ク置キ延テ此締削ヲ求メ
 ト欲セハ砲兵林國ノ一部ヲ割ヒテ之ニ轉用スルノ
 法アルノミ此議果シテ作戰上ノ要求ヲ容レ得ルヤ否
 抑モ此方法タルヤ我野戰砲兵ヲミテ火ニ其兵力ヲ減
 殺シ施テ其効力ヲ野戰場裏ニ發揚スルヲ能ハサル不
 利ノ情況ニ陥ラシムルノ恐アルヲ以テ忽諸ニ決スヘ
 キモノニアラサルナリ之ヲ懸スルニ砲兵ノ速勢ハ猛
 烈ナル砲火ノ威力ニ依リ勉メテ迅速ニ歩兵ノ攻撃ヲ
 準備シ之ヲ決戰ノ利ヲ博セシムルニ在ルカ故ニ
 此方ヲ減殺セシトスルノ手假ハ今日ノ戰術上勉メテ

之ヲ避ケサルヘカラス近年各國ノ競ヲテ軍備ノ拡張
 ヲ圖ルキ當リ各兵種ノ比例上砲兵ノ増加ニ重ヲ置テ
 所以決シテ謂ナキニアテサルナリ今試ニ陸軍國トシ
 テ其上指示シ得ヘキ二三ノ邦國ニ對シ野戰砲兵ノ兵
 力如何ヲ比較スルニ各其騎砲兵ヲ扣除スルモ尙尤ノ
 結果ヲ呈スルヲ見ルヘシ

露國軍團

甲師團 八中隊 六十四門
 乙師團 六中隊 四十八門
 丙師團 八中隊 二增加スルノ計畫アリ

師團平均五十六門

獨逸軍團

甲師團 十二中隊 七十二門
 乙師團 十二中隊 七十二門
 丙師團 八中隊 四十八門

師團平均七十二門

佛國軍團
 師團 六
 中隊 三十六
 門 三十六
 師團平均六門

帝國全軍
 全軍 三十六
 師團 四
 中隊 七十八
 門 四十六
 師團平均六門

此比較ニ依レハ帝國ノ野戰砲兵ハ列強中最高等ノ位
 置ニアリ故ニ均勢上尙之ヨリ減税スルヲ許サ。ルノ
 時我独リ好テ之ヲ減セントスルヲ如キハ將來ノ作戦
 上不利ノ最モ甚クシキ也。屬ス故ニ此方法ハ經濟
 上最優等ノ手段ニ屬スト。野戰全般ノ作戦上許ス
 可テサル不利ノ其間ニ横ハリアルヲ以テ今日遠ニ採
 用スヘキモノニアラサルナリ。於是乎更ニ他ノ便法ヲ
 講セサル可テス

作戦及編制ノ要求ヲ答レ能ク以上ノ目的ヲ達シ得ル
 ノ便法ハ要塞砲兵ヲ基幹トシテ戦時此隊ヲ動員特設
 スルニ在リ之カ爲メ戦時要塞砲兵ノ兵力ヲ減殺スル
 ノ弊アリト是レ此弊ヲ作戦ト至大ノ影響ヲ有セサル
 中リ我軍攻勢ヲ取ル場合ニ在テハ内地要塞ノ守備ニ
 資シテ既備ヲ要ムルノ度小ナルヲ以テ要塞砲兵ノ兵
 力ヲ多少減殺スルモ之カ爲メ作戦全般ノ利害ヲ左右
 スル方如キ重大ノ關係ヲ有セサルカ故ニ此場合ニ於
 ケル制書ハ深ク詳究スルヲ要セサルハ之レ又ニ我
 軍ニ守備ヲ取ル場合ニ在テハ如キ要塞ノ守備最モ嚴密
 ナリ野戦軍非特射隊ヲ棄ツル故ハサルヲアリ脚
 下戰時要塞砲兵ヲ割ヒテ特設セシメタル野戦補給隊
 隊ハ多クノ場合ニ於テ備ハテニ遠道スルモノト後進

各要塞位置ノ關係上海正南ノ距離ハ數ニ嚴肅ヲテシ
 ムルノ必要各相同シト雖陸正南ニ在テハ作戦全般
 ノ關係上大ニ其趣ヲ異ニスルヲ常トス今進チ要塞防
 禦上要塞砲兵ノ運用法如何ヲ考ツルニ其法先ツニア
 ヲ見ルヘシ一ハ各要塞皆敵ノ本攻ヲ受クルモノト假
 定シ之ニ必要ナル兵力ヲ豫メ配賦シ終始之ヲ以テ其
 防禦ヲ完フセシトスルニ一ハ豫メ應急ノ兵力ハ之
 ヲ配賦シ他ハ其國ノ地勢上一個若クハ數個ニ集團ト
 置キ敵ノ作戦目標畧ホ判断セラレタル場合ニ於テ其

作戦地方ニ横ハリアル要塞ニ所要ノ兵力ヲ送致スル
 是ナリ前者ハ周兵上有利ノ策ニヤニナルノミナリ
 豫々其金力ヲ各要塞ニ共ニルニ以テ砲戦間之ヲ使用
 ニ供スル豫備砲ノ全数ヲ平時各要塞ニ分蓄セラル
 得ニ蓋シ要塞砲兵ノ陸正面ニ對スル火力ハ今日ノ
 要塞戦術上主トシテ此豫備砲ノ多少ニ依リテ増減
 故ニ此編成ニ関シテ更ニ章ヲ遂テテ研究スル所
 ントス夫レ既ニ述ブル如ク各要塞ニ對シ敵ノ本意
 一抗抵シ得ニキ所要ノ豫備砲ヲ平時ヨリ全部配賦
 得ニ戰時運輸機関ノ繁劇ナル時ニ際シ其輸送
 一部ヲ奪フヲ如ク不利ノ手段ヲ道ニ得ルヲ以テ
 戦上無上ノ良策ト謂フノ得ニキ是レ今日ノ國勢
 經濟上許シ能ハサルモ、ト云テ是レ手交遊故ニ

亦便ニシテ、隨機輸送、途ナク、要塞ヲ除ク、外ヲハ、
 具態備砲ヲ、彼此流用スルノ方法ヲ取テ、サレバ、可ク、
 此議果シテ、帝國ノ客ル、所ト為ラ、用兵上、彼此違テ、
 巧妙ヲ得、多少、要塞砲兵ノ兵力ヲ割テ、之ヲ野戰編隊
 強隊ニ轉用スルニ、要塞全般ノ防禦上、甚ク、不利ノ點
 總テ、認メ、サレナリ
 作戦及經濟ノ要求、能ク、要塞砲兵ヲ、基幹トシ、
 野戰編隊砲隊ヲ、戰時動員特設スルノ方法ヲ、確定スル
 こと、次ヲ起ル、ハ、問題ハ、之ノ戰時編制ナリトス
 此砲隊ノ編制ニ、關シ、大隊組織ヲ用ユルカ、或ハ、野戰編
 成ヲ、專ニ、ルリ、問題ハ、軍ノ大小ニ、依リ、自ラ、次第ニ、
 行ヒ、ナリト、並、凡、其、運用上、少ク、ハ、大隊、独立スル、
 場合、多ク、ラン、故ニ、我、金、軍、ノ、於テ、獨立、大隊、三個、ヲ、編成ス

ルノ方法ヲ規定シ若シ其ニ個若クハ三個ヲ一軍ニ屬
 スル必要アル場合ニ於テハ、特ニ聯隊本部ヲ添加ス
 ルノ方針ヲ採ラントス
 戦時獨立野戰榴彈砲大隊編制成ルニ至レハ其人馬
 充用之ヲ何クモ求メテ敷其特校及砲手ハ之ヲ要塞砲
 兵ニ其取率及鞍馬ハ主トシテ野戰砲兵旅團ニ前ニ
 其彈藥縦列用人馬ハ主トシテ輜重兵大隊ニ依リテ之
 ヲ求人サレ可ラス之カ為メ砲兵旅團ノ各聯隊ニ平時
 砲十五頭ノ鞍馬ヲ増加シ戦時此大隊ノ用ニ供セシム
 ルノ必要アリ之ニ及ニ其兵員ハ特ニ徵兵救ヲ増加セ
 ンルモ適宜大隊ノ需要ニ應セシムルヲ得ヘキモノト
 ス(第一表参照)
 故ニ之カ為メ経費ノ点ニ於テ特ニ顧慮スルモノハ唯

馬匹初度購買費、鞍馬具費及年割飼養費、トス、即

鞍馬全費 三六〇 購買費及初年経常費 六六、七、四〇

鞍馬具 三六〇 購買費 三、五、〇、四〇

改修費 三、九、三三

新設ノ初年ニ於テ、十萬一千七百八十圓ヲ消費

シ、了ラ得、次年ヨリハ年々僅ニ四萬一千九百二十

三圓ヲ以テ作戦上重大ナル此要求ヲ充テシ得、ハキモ

トス

第二章 繫駕攻城砲兵隊

廿七八年戦役ノ際臨時特設セシ徒歩砲兵隊ノ戦地ニ

於テ吾人ニ與ハル結果、今日之ヲ追懐ヒルニ忍ヒ

テ、其ノ苦シシ之カ為、後後此隊ノ常設ヲ囑ヘ大ニ其

成立ニ努メタルモノアリシト雖也當時ノ時局尚ホ之
 ヲ容ル、ニ容ナルモノアリ茲尙今日ニ至リテ尚ホ決
 スル所アルヲ見ス然レ近キ將來ニ於テ發起スヘキ要
 塞戰ノ要求ニ對シ今日此際ノ成立ヲ畫策スルノ必要
 アルヲハ世上既ニ定論アラシ故ニ今之ニ對シ好テ辯
 ヲ辨スルノ必要ナキニ似タリト雖也從來屢其成立ヲ
 討リテ常ニ失敗ニ帰スル所以ノモトヲハ時局ノ緩
 急ニ支配セラレサルモノナシ之ヲ要スルニ作戰ノ要
 求候令至大ナル事時局ニ合ハサシハ其成効ヲ見ル
 丁妙ナキモトス故ニ真ニ其成立ヲ期セント欲セハ
 能ク時局ノ緩急ニ處リ作戰上讓歩ヲ得ヘキ限リハ努
 メテ之ヲ讓歩シ以テ諸般ノ事項ヲ研究確定スルノ手
 段ニ出テサレ可クサルナリ

今日、在りて尚、其常設ヲ罷ラシメ、
 專ラ作戰ノ目的ヲ達スルノ爲、
 所ナルヲ見、ト雖、今日ノ特局果シテ
 容レ得ルヤ否、若シ尚ホ之ヲ容ル、ニ
 答テリトセハ、是亦一ノ空論タルニ
 終ラシメ、蓋シ特局ノ制裁ハ、多クハ
 經濟ノ点ヨリ来ル經濟ニシテ、若シ之ヲ
 容ル、ト得ハ、他ハ自ラ決スル所
 ナラシ、顧フニ、今時ニ制定セテ、レ
 シトスル新式攻守城砲ハ、我軍未
 ノ嘗テ其一ヲ有セズ、是ヲ以テ、
 目下ノ要求ヲ充タフニ、ト欲セハ、
 莫大ノ困難ヲ擲ケルヲ得ス、今吾人
 カ将来ノ目標ニ對シ、最小限ニ策
 定セシ、徒歩砲兵隊、砲種砲教ヲ
 畧示スルニ、概テ左ノ如シ

野戰榴彈砲隊 三大隊 十二冊榴彈砲 五十四門

繫駕攻城砲隊

三聯隊

十五珊榴砲
十珊半加農

百八門
五十四門

今此火砲ヲ整備スル為メ吾人ハ幾何ノ國費ヲ擲ツテ
要スルカ試ニ充ニ算セシ

十二珊米榴砲

單價

八、六四七、〇〇〇

全價

四、五六三、〇〇〇

十五珊米榴砲

單價

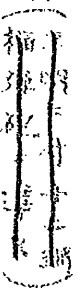
一、四七九、五〇〇

全價

一、五九三、五〇〇

十珊半加農

單價



一、六三〇、九〇〇

全價

八、八〇七、〇〇〇

0180

合計 三、九四一、三一九四〇〇

此合計ハ單ニ火砲ノミノ價額ヲ示スモ、ニシテ此外

之ニ伴フ彈藥費ヲ加算セザル可ラス、今攻城砲ノ彈藥

トシテ各國ノ準備セル數額ヲ調査スルニ概テ定メ如

獨逸國 一門ニ對シ 一千發

仏國 一千乃至千五百發

露國 一千發

故ニ帝國若シ之ニ準シテ其彈藥ヲ準備セント欲セバ

實ニ尤ノ巨額ニ達スルヲ見ルハシ

十二冊米栴彈砲彈藥 五万四千發

單價平均 四百七十六

全價 二、四七〇、二八四、〇〇〇

十五珊米榴彈砲彈藥

十萬八千發

單價平均

八八四一〇一

全價

九、五、一、四、九、〇、八、四、〇、〇、〇

十珊米加農彈藥

五萬四千發

單價平均

四、〇、四、〇、〇、〇

全價

二、二、六、〇、〇、〇、〇、〇、〇、〇

合計

火砲彈藥總計

一、七、〇、八、六、四、〇、〇、〇、〇、〇、〇

以上記スル所ハ單ニ徒歩砲兵隊ノ成立上久シク可
 火砲彈藥ノ整備ニ要スル經費ノ示メニ止ル
 又、トモ改ニ此外尙ホ次篇練陳セリ要塞豫備砲ニ関
 又、ル經費ノ殆ト之ト伯仲スルモノアルヲ考慮セサル
 可ク、ス前篇既ニ論ヌル如ク徒歩砲兵隊ト要塞豫備砲

0182

八五、相関算也。此ノ必取アルヲ以テ其整備ニ
 關シテ亦互ニ相伴ハルカニ可クナルモノアリ故
 此際國家ノ支拂ヲハキ經費ハ此ニ付ノ合算ニ等
 シキモノト見做スノ至當ナルヲ信ス果シテ然ラハ前
 陳總計額ニ尤ノ大砲彈藥概差費ノ加差スルヲ要スハ

要塞隊備砲

十聯米半乃
至十五聯米

二百八十門

一門二百彈藥
道百發

大砲製造費

三、三一七八〇九四〇〇

彈藥費

七、五七〇一八二四〇〇

同

七聯半加裝
機關砲

二百〇八門
三十三門

一門五百發
一門四百發

大砲製造費

二、六四六七〇〇〇

彈藥費

七聯半加裝
機關砲

二、二一六八〇〇〇〇
一、九七五七六〇〇

合計

一、二、三、八、九、〇、三、九、〇、〇、〇

(七聯半加裝ハ七聯野山砲ニ克式野山砲
 ヲ應用スルヲ以テ製造費ヲ差セス)

即チ吾人カ茲ニ策定セントスル徒歩砲兵隊及要塞隊
備砲ヲ整備センニハ國家ニ對シテ魚慮二千九百四十
七万五千四百五十円。四十銭ノ巨費ヲ新兵器彈藥
費トシテ要求セサルヲ得ス之ヲ去ル三十年ヨリ本年
度ニ至ル戦後四ケ年間ニ於ケル平均兵器彈藥隊美額ニ
百六十七万。九百七十九円。五十八銭ニ比スルニ實
ニ十倍強ナルヲ見ルヘシ今仮ニ之ヲ七年経続費トシテ
支出スルモノト仮定スルモ年々四百二十一万。七
七十八円六十銭ノ増額ヲ忍ハサルヲ得サルナリ軍國
ノ事更ニ經費ヲ要スルモノ独リ之ノミナラス前章既
ニ論スル如ク砲臺建築費ノ既定隊美額ハ現在ノ計畫
ヲ實施スルニ大ナル不足ヲ訴ヘ更ニ追加隊美ヲ要求
スルニアラサレハ要塞ノ設備上其完成ヲ期シ能ハサ

此情況ヲ呈セリ故ニ之カ爲メ將來更ニ其増額ヲ要ス
 ルノ日アルヲ胸義ニ置カサル可ラス此ノ如キ賞途才
 端ナル時ニ當リ尚又部隊ノ新設ヲ望ムカ如キハ作戦
 上方止ヲ得サル理由アルモノ、外敢テ企圖シ得ヘキ
 モノニアテサルナリ
 以上述フル所ニ依レハ今日其常設ヲ唱フルモ到底時
 局ノ容ル、所トナテサルヤ明ケシ故ニ作戦上多少不
 利ノ感ナキニアテサルモ茲ニ戦時特設ノ方法ヲ規定
 シ以テ多年渴望シ来ル徒歩砲兵隊ノ成立ヲ期スルノ
 優レルニ如カサルナリ是レ戦時ニ於テ其勤員業務ニ
 比較的多少ノ繁雜ヲ忍ビ得ハ獨リ編制上ノ目的ヲ達
 シ得ル、ミサテス併セテ作戦上ノ要求ヲ充タシ得ヘ
 ケレハナリ

然其常設ヲ唱フルモノ亦別ニ一ノ理由ヲ有セリ曰
要塞砲兵ノ如キ複雑ナル數種火砲ノ使用ニ任スルモ
ノハ其編制ニ依リテ教育ノ多岐ニ涉ルヲ避ケサル可
ラス今徒歩砲兵隊ヲ要塞砲兵隊ヨリ分離新設スルハ
ハ茲ニ海岸砲兵ト徒歩砲兵トノ間ニ一ノ障障ヲ生ス
ルノ觀ヲ呈スルニ至ルト雖氏教育ノ点ニ於テ彼此大
ニ其繁ヲ去リ而シテ作戰ノ目的ヲ達スルノ点ニ於テ
殆ト相異ナルナレト蓋シ此理由ニ基キ改正セントス
ル新編制ノ結果ハ要スルニ徒歩砲兵隊ノ戰時得員ヲ以
テ擊駕徒歩砲兵隊ト要塞陸正面防禦ノ各種火砲ノ要
員トヲ充足セシテ要塞砲兵ノ戰時得員ハ單ニ海
正面防禦ノ要員ヲ充足スルニ止ムルモト為ル是レ
教育ヲ軍簡ナラシム以テ其道ニ熟達セシムルノ利ニ

於テハ或ハ現時ノ編制ニ優ルモノアリシト雖此ノカ
為ノ要塞防禦上彼是殆ト流用シ能ハサルニ種ノ守城
砲兵ヲ生スルノ不利ヲ忍ハサルヲ得サルナリ
抑モ平時此隊ヲ常設スルト戰時之ヲ新設スルト其方
法ノ如何ヲ問ハス之ニ期スル所ノ兵力ハ決シテ相異
ナルコトナシ之ヲ要スルニ將ニ我作戰地ニ現出セン
トスル新式要塞ノ防禦力如何ニ依リテ策定セサル可
ラサルナリ
隣邦ニ於ケル要塞設備ノ工程ハ今方ニ改築若クハ新
設期ニ屬シ之ニ関スル情報亦屢聞知スル所アリト雖
氏未ク之ヲ以テ攻城材料策定ノ資料ト為スニ足ルモ
ノヲ見ス故ニ徒歩砲兵隊ノ兵力起美ノ素質タル攻城
砲ノ員教ヲ策定スルニ當リ被攻撃要塞ノ防禦力ニ基

礎ヲ置ク能ハサルハ吾人ノ最モ遺憾トスル所ナリ然
 此今方ニ進行シツ、アルモノ及將來築設セラレヘキ
 要塞ノ設備ハ晚今ノ要塞戰術ニ鑑ミ新式築城ノ様式
 ニ從フモノト仮想ニ以テ要塞ノ位置及其地勢ニ對シ
 一般ノ防禦判斷ヲ下ス片ハ茲ニ其防禦力ノ如何ヲ想
 定シ得ヘキモノトス今此判斷ニ依リ進キ未來ニ於テ
 吾人カ遭遇セントスル要塞ノ防禦力ハ如何ナル程度
 ニ達シ得ルカヲ察スルニ我攻撃方面ノ戰鬥ニ對シ約
 百五十門ノ守城砲ヲ使用シ得ルモノト想定スルヲ得
 ヘキナリ若シ此想定ニシテ大ナル誤差ナキモノトセ
 ば吾人ハ之ヲ以テ徒歩砲兵隊ノ編制ニ際シ兵力起差
 ノ基礎ヲ定ムルニ下歎ヲ抑マ戰備完全ナル要塞ニ對
 シ攻城ノ目的ヲ達シ得ント歎ハ先ツ守城砲兵ノ火

力ヲ沈黙セシメノ專ヲ突撃ノ準備ヲ完カラシメサル可
 ラス之ヲ爲メ攻城砲兵ニ要求スル火力ハ守城砲兵ニ
 對シ少ナリモ一倍半ノ優勢ヲ占メサル可ラサルヤ也既
 是論アリ於是乎守城砲約百五十門ニ對シ約二百二
 十門ノ攻城砲ヲ要求セサル可ラス即チ此砲教ヲ運用
 セシムルハ其目的ノ下ニ編制セントスル徒歩砲兵隊ハ
 應ニ五十四門ヨリ成ル隊四個ヲ要スヘシ蓋シ作戰
 ノ經過ハ當時如何ニ變化スヘキヤ隊メ確言スルヲ得
 ハキモノニアラスト虽氏前章論スル所ノ野戰榴彈砲
 隊ハ多クノ場合ニ於テ攻城戰ノ先驅ト爲リ尋テ本攻
 撃ニ参與シ得ルノ公算大ナルヲ以テ茲ニ所謂擊駕徒
 歩砲兵隊ナルモノハ三個隊ヲ編制シ得ルヲ以テ滿
 足セサル可ラサルナリ是レ吾人カ將ニ遭遇セントス

ル隣邦要塞ノ一個ヲ攻撃スルニ必要ナル單位ヲ示ス
モノトス故ニ若シ數軍同時ニ數要塞ヲ攻撃スルカ如
キ將來殆ト有リ得ヘカヲサレ作戰ノ狀況ヲ呈スル場
合ニ在テハ次篇論スル所ノ要塞隊備砲ヲ以テ其用ヲ
充タスノ方法ヲ採ラサル可ラス是レ即チ要塞隊備砲
ハ豫備攻城砲タル所以ナリトス
我作戰地ノ狀況ヲ豫想スルニ要塞所在地ニ至ル運輸
機關ノ發達ハ作戰上ノ顧慮ヲ促スニ足ルモノ少ナレ
故ニ鉄道若クハ水路ニ依リテ攻城材料ヲ攻圍線附近
ニ輸送スルノ企望ハ之ヲ抛擲セサルヲ得ス加之作戰
全般ノ經過ヲ迅速ナラシメ以テ全局ノ勝利ヲ收得セ
ント歎セハ俄然要塞前ニ猛進シ守者ヲシテ其戰備ニ
充分ノ時日ヲ用カレメサルヲ要ス是レ今編制セント

スル徒歩砲兵隊ニ緊駕式ヲ要求スル所以ナリ
帝國若シ緊駕徒歩砲兵隊三個ヲ勤員スルノ必要ヲ承認
セハ吾人ハ尚進テ其人員ノ充足法ニ関シ論述スル所
アラサル可ラス然レ其關係ヤ要塞砲兵ノ戰時得員及
其要員ニ影響ヲ有スル大ナルヲ以テ次篇ニ於テ之ヲ
詳論セントス

第三篇 要塞隊備砲

第一章 砲種砲数ノ決定

要塞隊備砲ノ目的ハ主トシテ戰鬪方面ノ砲戰ニ任シ
以テ攻城砲兵ノ攻撃動作ヲ制壓スルニ在リト雖レ或ハ
防禦陣地側防ノ目的ヲ以テ戰時築設スル砲台ノ兵備
ト為リ或ハ城外支隊若クハ出撃部隊ノ砲兵ト為ルモ
ノアリ故ニ其砲種ノ撥定ニ関シテハ是等目的ノ異同

ヲ顧慮シ且ツ豫備攻城廠ノ要求ヲ充クシ得ヘキ要素
ヲ求メサル可ラス抑モ其目的ノ異同ニ從ヒ自ラ其口
徑ニ差異ヲ生スルハ自然ノ結果ナリト雖モ要塞隊備
砲ノ性質上銃ヲ運動自在ナルヲ要スルヤ一ナリ於是
乎吾人カ茲ニ撰定セントスル火砲ハ其口径ノ如何ヲ問
ハス銃ヲ双輪式砲架ヲ有スルモノヲ採リ且ツ豫備攻
城砲ノ性質ヲ有セシメン為メ之ニ前車ヲ附スルノ必
要アリトス要スルハ之ニ所要ノ繫駕用材料ヲモ附ス
前述ノ目的ヲ達スル為メ如何ナル口径ノ火砲ヲ撰定
セハ可ナルヤノ問題ハ世既ニ定説アリ敢テ吾人ノ詳
解ヲ要セサル可シ故ニ今一步ヲ進メ極メテ單簡ニ之ヲ
約言セハ遠戰及砲戰ノ目的ヲ以テ撰定スル豫備砲ハ
全ク攻城砲ト同一種類ノ火砲ヲ採リ其他ノモノハ総

0192

ヲ近戦ニ最必要ナル小口径砲ヲ用ユルノ一語是ナリ
海岸要塞陸正面防禦ノ設備ハ多ク要塞ノ位置及其地
勢ニ依リ決定セラレヘシト虽氏作戰上我野戰軍トノ
關係如何ニ依リテ大ニ其趣ヲ異ニスルヲ得ヘキモ
トス今是等諸般ノ關係ニ照ラシ各要塞ノ防禦要領書
ヲ洞觀スル片ハ性々改正ノ必要ヲ認ムルモノアラシ
何トナレハ守勢的國防ノ方針ヲ採リシ時代ニ於テ策
定セラレタル防禦計畫ハ攻勢的國防ノ方針ニ依リテ
軍備ノ擴張ヲ遂行セシ今日多少改正ヲ加フルノ必要
アルハ自然ノ結果ナレハナリ又海正面防禦ノ關係ハ
本章ノ問題外ニ屬スト虽氏是亦改正ノ必要ヲ認ムル
ノ点尠ナカラサルナリ抑モ海正面ノ防禦ニ二種ノ方
法アリ曰砲戰ヲ以テ防禦ノ目的ヲ達セントスルモノ

曰要撃ヲ以テ同一ノ目的ヲ達セントスルモ是ナリ
若シ国家経済ノ点ヲ顧慮ノ外ニ置キ作戦上安全無比
ノ要求ヲ充タサント欲セハ一要塞ノ防禦設備ニ当リ
二者共ニ其目的ヲ達スルニ充分ナル火炮ヲ備ヘサル可
ラスト虽此ノ如キ設備ハ今日ノ國勢之ヲ許サ、ル
ノミナラス海軍擴張ノ結果トシテ作戦上ニモ亦深ク
其必要ヲ認メサルニ至レリ果シテ然ラハ其設備ヲ決
定スルニ當リ要塞ノ位置及其任務ヲ計畫ノ基礎タラ
シムルノ外尚海軍作戦トノ關係如何ヲ顧慮シ以テ防
禦ノ主力ヲ砲戦ニ置クカ若クハ要撃ニ置クカノ意思ヲ
先決セサル可ラス意思既ニ其一ニ決セハ設備上必要
ナル火炮ノ種類及員數ハ海正面一般ノ地勢ニ依リ自
ラ決定セラルヘキモノトス

造兵及製艦術ノ著シキ進歩ハ吾人ヲシテ回来ノ兵器ニ
 安スル能ハサルニ至ラシメタリ是レ今回要塞備砲ノ
 制式ニ大ナル改正ヲ要求シタル所以ナラン歟
 前項諸般ノ関係ヨリ觀察セハ各要塞ノ現兵備ハ海正
 面ト陸正面トヲ問ハス此際之ヲ改正スルノ必要ヲ認
 ムルモノ多カラシ其改正ニ関シテハ吾人別ニ成案アリ
 而モ事問題外ニ屬スルヲ以テ今之ヲ茲ニ贅セリル
 ナリ
 吾人カ茲ニ策定セントスル要塞隊備砲ノ員數ハ此成
 案ニ基キ打美セシモノニシテ各要塞ノ為メ準備スヘ
 キモノ概テ尤ノ如シ

東京湾要塞	守城砲	九十門	七珊半加農	四十八門	機関砲	二十八門
由良要塞	守城砲	七十六門	七珊半加農	二十門	機関砲	十六門

鳴門要塞 守城砲 十六門 七珊半加農 八門 機関砲 四門

藝津要塞 守城砲 〃 七珊半加農 八門 機関砲 〃

吳 要塞 守城砲 三十門 七珊半加農 十二門 機関砲 十五門

下之関要塞 守城砲 百二門 七珊半加農 四十四門 機関砲 二十六門

佐世保要塞 守城砲 六十門 七珊半加農 二十四門 機関砲 十二門

對馬要塞 守城砲 四十一門 七珊半加農 十二門 機関砲 十門

函館要塞 守城砲 八門 七珊半加農 八門 機関砲 八門

鼻 鶴 要塞 守城砲 六十六門 七珊半加農 十六門 機関砲 十門

長崎要塞 守城砲 四門 七珊半加農 八門 機関砲 四門

前篇既ニ論スル如ク攻勢作戰ヲ取ル場合ニ在テハ緊

駕徒歩砲兵隊ヲ專ラ攻城ノ目的ニ使用スヘシト遂ニ

帝國若シ守勢作戰ヲ取ル、止ヲ得サル場合ニ遭遇セ

シトキハ之ヲ守城ノ目的ニ供用セサル可ラス故ニ第

一ノ目的ニ對シテハ其勤員地ヲ輸送上ノ關係ヨリ爾

後ノ出征ニ便宜ナル地方ニ撥定シ又第二ノ目的ニ對
シテハ敵ノ本攻何レノ要塞ニ級ヌルカ其判断ヲ下
シタル後之ヲ要塞内ニ送遣スルモ尚時期ヲ誤ルカ如
キナカシムル為メ附近各要塞ニ對シ輸送便利ナ
ル地方ニ撥定セサル可ラス今此要求ヲ充メヌ為メ吾
人ハ東京大坂及小倉ノ三地方ヲ以テ緊駕徒歩砲兵聯
隊ノ勤員地ニ指定セントス是レ独り前上ノ要求ヲ容
レ得ルノミナラス其勤員ノ実行上他ノ地方ニ比シ比
較的良好ノ便利ヲ有スルハナリ今試ニ第一聯隊ヲ東
京第二聯隊ヲ大坂及第三聯隊ヲ小倉ニ於テ勤員スル
モノト仮定シ是等各聯隊カ守勢作戰ノ場合ニ於テ如
何ニ運用セラレントスルカヲ察スルニ第一聯隊ハ東
京湾要塞ノ戦闘序列内ニ入り第二聯隊ハ敵ノ本攻我

南海ニ在ルカ或ハ我北海ニ在ルカニ從ヒ或ハ由良要
塞ニ或ハ舞鶴要塞ニ使用セラレ而シテ第三聯隊ハ下
之関要塞ノ防禦ニ供用セラル、ニ至ル可シ吾人ハ此
第三聯隊ノ運用ニ関シ尙佐世倅要塞ノ防禦ニ應用
スルノ目的ヲ以テ其動員地ノ撥定ニ聊ク研究ヲ竭セ
シヨアリト虽凡九州沿岸ノ状況要塞位置ノ関係及内
地交通ノ景況ハ此希望ヲ容ル、了能ハサルヲ知ルニ
至レリ

東京湾由良下之関及舞鶴要塞ノ防禦ニ繋駕徒歩砲兵
隊各一聯隊ヲ使用シ得ルモノトセハ是等要塞ニ對シ
テハ前項ノ豫備砲中ヨリ各五十四門ヲ減スルヲ得ヘ
キモノトス故ニ平時要塞内ニ分蓄スル豫備守城砲ノ
員數ハ應ニ左ノ如クナル可シ

東京湾要塞

三十六門

由良要塞

二十四門

下之関要塞

四十八門

舞鶴要塞

十二門

此他ノ要塞ハ前項記載教ニ同シ

此砲教ヲ以テ守勢作戰計畫訓令第七款ニシテ時期ヲ安

全ニ経過セントスルハ作戰上危計タルヲ免レストノ

疑議ヲ奏スルモノアラント虽氏吾人ハ此時期ニ於ケ

ル敵ノ企圖ニ照ラシ之ヲ以テ防禦ノ目的ヲ達シ得ル

モノト信セスンハアラス何トナレハ堡壘砲台ノ兵備

ハ仮令豫備砲ノ力ヲ藉ラサルモ至大ノ砲兵力ヲ有セ

サル敵ノ企圖ニ對シ有効ニ其防禦線ヲ保持シ得ルモ

ノタレハナリ

第二章 彈藥ノ準備

要塞豫備砲ノ分蓄大ニ前章論スル所ニ如シ之ニ要人
 以彈藥ノ準備ノ如何ニ之ヲ決定セハ可キルヲ平時要
 塞内ニ分蓄スルニ對シテハ要塞彈藥備附規則ニ
 依リテ逐次準備スルニ取テ論ヲ待タズト遂ニ臨戰
 要塞ノ戰開キ内ニ入リテハ徒歩砲兵隊ノ彈藥準備
 之ノ間ニテハ戰術ノ考慮ノ價値ヲ有セリ蓋シ此隊ヲ要塞
 ニ送遣スルニ對シテハ時期ニ在リテ作戰全般ノ關係
 上其附近ノ諸送威閉ノ著シク繁劇ノ度ヲ高メ得ル之
 ニ依リテ其輸送ノ進行ニテ能ハカシキ場合トラシク又
 要塞内ノ交通設備所要ノ要求ニ達セリテ一等線々ノ源
 田ニ依リテ變作戰ノ場合ニ在リテ尚且繁雜ヲ撤スル
 能ハカシキ事情ヲ存セリ故ニ之ヲ以テ問發ノ争ヲ緊急

時機之際。要塞防禦上其機會。失々ルカ如キ。其
力シシメ。之ヲ為シ。徒歩若シ。鐵道行軍ニ對シ。常ニ著シ
ク困難ニ其ク。一應準備。如キ。際。之ヲ所定ノ要
塞内ニ送致シ置キ。一最ニ緊要ナリトス。於是乎吾人ハ今
徒歩砲兵隊。為シ。準備シ。トスル。彈藥。ニ分シテ
其動員地ト所定要塞ト。平時分蓄セ。テ。有到タルヲ
唱道。ト可シ
徒歩砲兵隊。彈藥費。一兩篇既ニ論。ル。如ク大砲購入
費。約六倍ニ騰。ル。其整備。ニ要ス。一時日亦短。日月ニ在
テ。之ヲ若シ。事ニ。之ヲ内ニ送兵。途人ニ。因テ。其彈藥。
如シ。盡ク。中斷自。製。造。一消。一。至。ル。之。力。為。人。三。個
取。隊。約。七。百。方。圓。ノ。所。ハ。一。得。ク。於。是。乎。吾。人。ハ。是。等
諸。般。ノ。要。求。ニ。對。シ。消。耗。的。整。備。ノ。方針。ヲ。採。リ。以。テ。因。費。

ノ幾分ヲ節セントス
 各國カ攻城輜重中ニ準備セル攻城砲ノ彈藥ハ通常一
 千發ニ達セリ是レ軍政ノ整備上多年ノ經歷ヲ有スル
 國家ニ在テハ敢テ困難ヲ感スルモノニアラスト雖モ
 帝國ノ如キハ即チ然ラス故ニ此彈藥ノ準備ニ関シテ
 ハ茲ニ尤ノ如ク決定セントス蓋シ之ヲ以テ各國ニ對
 スルモ敢テ作戰上ノ活動ヲ妨ケサル可シ
 徒歩砲兵聯隊ハ火砲一門ニ對シ其動員地ニ三百發所
 定要塞ハ五百發合計八百發ヲ準備シ而シテ要塞隊備
 砲ニ對シテハ一門五百發ノ比ヲ以テ當該要塞内ニ準
 備スルモノトス

第四篇 人員ノ充用

第一章 要塞砲兵

徒歩砲兵隊ノ兵器ハ全然要塞砲兵隊ト同一ナルモノ
ニシテ要塞戰術上彼是區別アルヲ認ムルノ点ナク其
教育モ亦其間殆ト帰一ナルヲ見ル故ニ其戰時要員ヲ
要塞砲兵ノ戰時得員中ヨリ充足スルノ方法ヲ求ムル
ハ自然ノ結果ニシテ敢テ異議ヲ唱フルモノナキヲ信
ス

今日教育總監部ノ唱道スル所ニ依レハ攻城砲一門ニ
對スル要員率ハ概子九ノ如ク決定セルモノ、如シ

海岸重砲 二十一名(最小限十八名)

攻守城砲 九名(戰鬪方面十八名)

海岸速射加農 五

故ニ吾人ハ努メテ此率ニ準拠スルノ希望ヲ有スト要
氏諸種ノ關係ニ依リ多少之ニ修正ヲ加ヘ尤ノ如ク決

宛

海岸砲

二十一

岸砲

十二

砲

九

砲

三

砲

八

砲

六

以要員幸々適同二以各要塞ノ全兵備ニ努メテ

要員ヲ計美々ニ以テ約三万人ニ付テ之ノ戰時

得員二万七千人ノ對照ニテ七箇全ノ兵備ヲ充

以テ往々砲兵隊ノ要員ヲ產出スル從ハ少ナリ然

レ各要塞ノ兵備ハ前篇屢言スル如ク此際改進ヲ加

メテ必要ノ點ヲ既ニ之ニ對シテ意見ヲ確立セリ故ニ

騎兵 現役 豫備役
 後備役
 一千五百五十八人
 二千五百二十二人

野戰 後備役
 二千九百人

砲兵 輸卒
 二百人

輜重 後備役
 四百人

兵 輸卒
 八百人

合計 七千六百八十人

今此過剩得員ヲ以テ徒歩砲兵隊ノ野戰諸隊ニ要求ス
 ル戰時要員約一万一千人(内約七千人)彈藥縦列及砲
 廠縦列ノ輸卒ニ比スレハ約三千五百人ノ不足ヲ見ル
 ト虽氏其多クハ輸卒要員ニ屬スルカ故ニ補助輸卒ヲ以テ
 其一部(砲廠縦列ノ如キ)ニ充ツルノ方針ヲ採ルヲ得
 シ之ヲ要スルニ吾人カ編制セントスル徒歩砲兵隊即

0206

ノ野戰榴彈砲隊三大隊及繫駕徒歩砲兵隊三聯隊ハ現
制ノ平時編制諸隊ノ過剩得員ヲ以テ戰時容易ニ動員
シ得ヘキモノトス

野戰榴彈砲大隊及繫駕徒歩砲兵隊ノ戰時編制表ハ
精査ノ結果取捨スルノ点多クハシト雖氏唯當事者
ノ参考ニ供スル為メ茲ニ附表トシテ提出セリ

第五篇 諸條規ノ増補

徒歩砲兵隊編制ノ結果ハ施テ陸軍戰時編制及陸軍動
員計畫令等總テ之ニ関スル諸條規ニ増補ヲ要スルノ
点多シ然レ今之ヲ茲ニ贅セサル所以ハ一ニ總務部
精査ニ待ツ所アラシカ為メナリ

徒歩砲兵隊編制及要塞隊備砲分當論ニ関スル意見

0207